



# サンクトペテルブルクにて

駒走 昭二（非文字資料研究センター 研究員）

この秋、初めてサンクトペテルブルクを訪ねた。長年の望みが叶ったの訪問である。日本からヘルシンキ経由で14時間。隣国とは思えぬ長旅に領土の広さをつくづく思い知らされる。ロシア第2の都市であるこの街の歴史は比較的浅く、建都まだ300年ほどしか経っていない。しかし、かつて帝政ロシアの首都として繁栄しただけのことはあり、建築物の 하나가豪壮とし、街全体が堂々たる威厳に包まれている。さすが久米邦武が『米欧回覧実記』の中で「建築ノ壮大ナルコト、欧陸ニテ第一ナルヘシ」と評しただけのことはある。西洋の歴史的な街の多くがそうであるように市街地には現代的な高層建築物はなく、低層の建物が整然と、そして広狭の減り張りをもって連なっている。そのためか日本の都市に比べて空がすっきりと広く感じられる。北のヴェネツィアとの呼び名もあるそうだが、大きく蛇行するネヴァ川を中心に多くの運河が街を巡っているさまは、ゴンドラこそ見かけないものの、確かに水の都ヴェネツィアを彷彿させる。また、街の主要道であるネフスキー大通りは、シャンゼリゼ通りに喩えられることもあるという。街の中心にそびえる旧海軍省の建物から街を一直線に貫くその大動脈は、沿道の洒落たオープンカフェや豪華なホテルの建物なども手伝って、なるほどパリの目抜き通りに似ていないこともない。ピョートル大帝が18世紀初頭に国の近代化を目指して建設した街は、ロシアという国が一方で日本との間に領土問題を抱えつつも、一方では間違いなく西洋にも位置する、まさにユーラシアの国であることをあらためて実感させるのである。

さて、今回の訪問者は私を含めて日本語学研究者3名。その目的は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部にて、日本からの漂流民たちが残した資料とそれに関するアカデミーの記録を調査することであった。周知の通り、ロシアへはかつて多くの日本人が漂着している。伊勢白子の大黒屋光太夫が帰国後、多くの情報を日本にもたらしたことは有名であるが、彼以外にも多くの日本人水手がロシアへ流れ着き、そこで

暮らし、帰国することなく一生を終えている。中でも私が最も関心を寄せているのが薩摩からの漂流民ゴンザとソウザである。

ゴンザとソウザは、1728年11月、若潮丸という船で他の15名の乗組員とともに薩摩から大坂へ向かった。薩摩藩の関係者に米、紙、布などを届けるためであった。しかし、船は途中で嵐に遭遇。半年以上漂流した後、翌年6月、カムチャツカの海岸に漂着した。一命をとりとめて安心したのもつかの間、一行はその地に巡回してきたコサックたちの襲撃を受け、17名中15名が惨殺されてしまう。その中にはゴンザの父親も含まれている。生き残った11歳のゴンザと36歳のソウザも彼らの奴隷として酷使されることになった。その半年後、派遣されて来た上級役人によって2人は幸い救助、保護されるのであるが、もちろん帰国できる術はなく、むしろ日本とは逆方向の西へ西へと大陸を移動させられることになる。ヤクーツク、トボリスク、モスクワ、そして1733年に遂に首都サンクトペテルブルクに到達する。女帝アンナ・ヨアノヴナは彼らと面会した後、彼らへの扶養と同時にロシア正教の洗礼、そしてロシア語の学習を命ずる。さらに1736年になると、科学アカデミーにてロシア語を学ぶだけでなく、自分たちの言葉を忘れないためにロシアの少年たちに日本語を教えるよう勅命を下す。その後、2人は科学アカデミー内に開設された日本語学校で給与をもらいながらロシア人子弟に日本語を教えていたが、やはりそれまでの過酷な暮らし、慣れない環境が災いしたのであろう。ソウザは1736年9月に43歳で、ゴンザは1739年12月に21歳で亡くなっている。

ところで、ゴンザはソウザの死後、科学アカデミーの司書補であり彼らの監督者でもあったアンドレイ・ボグダーノフと協力して日本語の参考書を6点作成している。『露日単語集』『日本語会話入門』『新スラヴ日本語辞典』『簡略日本文法』『友好会話手本集』『世界図絵』である。これらはすべてボグダーノフが用意したロシア

語をゴンザが日本語に訳し、キリル文字で記すという形式をとっている。露日辞典など存在しない18世紀のことであり、いずれもたいへん貴重な資料である。しかもゴンザは少年水手であり、また一般の民は全国共通語の意識など持たない時代の薩摩人であるため、そこに記載されている日本語は純粋な薩隅方言である。日本国内の過去の文献のほとんどは、中央語にもとづく書き言葉が漢字仮名交じりで記されているため、方言まで含めた日本語史を再構築するのに適さない。その点、本資料は方言がキリル文字という音素文字で記されているため、その生きた話し言葉をより精密に再現することが可能である。また当時の中央語と地方語との相違、そこから推察される言葉の伝播の様子、現代方言との相違から推察される方言内の変容の仕組み等、本資料から得られる情報とそこから展開しうる学問的興味は計り知れない。日本語学にとって一級の資料と言ってよいだろう。

今回の訪問で、本資料の原本を調査することができた。これまでは日本に伝わっているマイクロフィルムでしか閲覧することができなかったが、原本調査によって不鮮明な箇所の確認や、実物の装丁、サイズ、紙質等を知ることができた。残念ながら、その存在が期待された『世

界図絵』の清書本は発見することができず、その紛失を確信せざるを得ない結果となったが、その一方でこれまで日本に伝えられていなかった草稿本(『露日単語集』『日本語会話入門』)の存在が確認でき、さらにそれらのマイクロフィルムも後日、作成し譲渡してもらえることになった。そして最大の収穫だったのが、我々日本の研究者と科学アカデミーとの間で共同研究を立ち上げる約束が結ばれたことである。門前払いも覚悟していた我々にとって期待以上の成果であった。その他、報告すべきことは多々あるが、別の機会に譲る。

科学アカデミーでの調査は、外務省の方をはじめ多くの人々が仲介してくださり、ようやく実現したものである。実際の調査でも所長はじめ多くの研究員が友好的に協力してくださった。つくづく多くの人に支えられて研究が行えているのだと実感する。

科学アカデミーの図書室の窓からは目の前を流れるネヴァ川がよく見える。ソウザの死後、一人残されたゴンザは日々この大河を眺めながら、己に課せられた仕事に打ち込んだのではなからうか。図書室の窓辺で彼が作り上げた書物を手に取り、頁を繰り、筆跡を指でなぞりながら、彼の無念と熱意に思いを馳せた。故郷から遠く離れたこの異国の地で、建設が始まったばかりのこの西洋の街でたった一人、彼は何を想っていただろう。280年後に訪れた同郷の者として身の引き締まる思いであった。



写真1 現在の科学アカデミー東洋学研究所。19世紀に皇帝ニコライ1世が子息のために造った宮殿の一部である。



写真2 ネヴァ川を挟んで科学アカデミーの対岸に見えるペトロパブロフスク要塞。 Санктペテルブルクの歴史はこの建設から始まった。中央の聖堂は1733年建造。奇しくもゴンザたちが到着した年に完成したものである。